ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　――あれから一週間。

　田島道場のメンバーは、全員、帰りの船に揺らされていた。合宿のメニューが全て終わり、後は帰るだけだ。今、船の中には、田島辰巳達と優さんの他に、白と来夢音もいる。一氏も来たがっていたのだが、仕事の都合で同伴することは出来ず、少し残念そうな顔をしていた。

　別荘に来る前は互いに初対面だった拓馬達と白達も、今は結構仲良くなっている。これだけでも、今回の合宿の成果は中々のものだと言っても良いだろう。互いに互いが学ぶ所も多かったはずである。上手くいくかどうか、内心ヒヤヒヤしていた田島辰巳も、静かに胸をなでおろしていた。ちゃんと打ち合わせはしていたとは言え、相手は小学生。ちゃんと練習メニューについていけるかどうか心配していたのは事実だった。いい意味でそれを裏切ってくれたのは、流石はの娘と息子だと、田島辰巳は感心していた所だ。

　少々狭い船内は賑やかだ。流石に子供が六人も揃えば、そんなものだろう。優さんも、そんな彼等を微笑ましそうに見つめている。いや実は、お喋りを楽しむ子供達の顔に、ちょっとした違和感は覚えているのだが。会話の内容は、主に今回の合宿のことだ。学校での話題も偶に出るが、すぐ別の話題に移行するのは、きっと学校に行っていない良助と奈央に配慮しているからだろう。

だがその中で一人、天井をボーッと見つめ、会話に入っていない人物が一人いた。雅也である。

カビゴンが地面にメガトンパンチをした後、雅也達三人は巻き起こった土煙と、夜の暗闇に紛れて、急いでリングマ達から逃げ出したのだ。あの時の白と来夢音の驚いた表情は、今でも雅也の頭に残っている。それはそうだろう。普段からポケモンバトルの修行をしている奴が、戦っている相手に背中を向けるとは想像していなかったに違いないだろうし、実際二人は考えもしなかったのだから。

だが、雅也にはあれ以外の選択肢は無かった。正確に言えば、白と来夢音がいたために、あれ以外の選択肢が無かったのである。それは別に、あの二人が足手纏いだとか、そういうことでは無かった。それに彼の選択を、二人にも責める気持ちなど全く無い。寧ろ、その選択肢が正しかったことも理解している。ただ、ちょっと驚いてしまっただけなのだ。

彼は何故、その選択をしたのだろうか。それは、次の通りだ。

あの瞬間、彼の頭の中で、六塚の体から夥しい量の赤い液体が噴出した場面がフラッシュバックしていた。つい前日の出来事だったのに、その記憶がかなり薄れてしまっていた雅也が受けた衝撃は、とても一言では言い表せないだろう。恐らく、人間としての本能が、それを忘れさせていたのでは無いだろうか。あんな事があった次の日なのにも関わらず、彼が割と普通に生活していたのは、あの日の出来事、あのイメージが頭からすっぽりと抜けていたためである。

そんなイメージが、あの時、白と来夢音に重なったのだ。二度とあんな風にはさせまいと、あの時の彼の選択は、半分錯乱状態であったと言っても過言では無い。

結果として、三人は怪我らしい怪我も無く、別荘に戻ってこれた。あの日リングマ達と戦ったことは、三人だけの秘密――主に白を気遣って――になっている。

加えて、雅也の中で、ある一つの目標が明確に決まった瞬間でもあった。

ジャックを倒す。

これが、彼の目標である。

別に、今までもこの目標が全く無い訳では無かった。最初にジャックに殺されかけてから、この目標自体はぼんやりと彼の中であったのだが、それが今回の一軒で、はっきりと口に……勿論自分のポケモンだけにだが、したのである。

勿論、その目標を達成するために、具体的に何をすればいいのかは彼にはまだ分からない。それでも、自分のポケモン達、ピカチュウ、ルカリオ、フシギソウ、カメール、リザード、カビゴン、ハピナス、フーディンは分かってくれたし、全面的に協力する意思を見せた。

これは決して、復讐では無い。

まだ雅也達の中にある、ジャックに対するモヤモヤは晴れていないからだ。これの正体が分からない内は、彼等がこの感情を持つことは恐らく無いのではないだろうか。なにせ雅也はまだ、小学一年生なのだ。恨みや憎しみのような感情を持つには、彼はまだ幼すぎる。

これからどうするのか。どうしたらいいのか、雅也は天井に目を向けながら、それを考えていた。一応、非現実的な案はいくつか出ているのだがそれは当然没案だ。まともな案は、全く出ていない。

「ねえ雅也。ボーッとしていないで、こっちでみんなと何か話さない？」

困って溜息を吐こうとした雅也に、来夢音がそう誘ってくる。そこで彼は、自分が会話に参加していないことで、少しだけ周りが困ったような顔をしていたことに、ようやく気がついた。

「あ……ああ、ごめんごめん」

　慌てて謝ると、皆がプッと吹き出す。釣られて彼も吹き出した。違和感の正体に薄々気がついていた優さんも、柔和な微笑みを皆に向けていた。こんな光景が、とても煌びやかに見えて、平和に思えたのだ。

　そう。今は、これでいい。こんな風に笑い合える日常は、大事に出来る時は大事にすべきだ。

こんな光景が、いつ見れなくなってしまうかも分からないのだから。